

人の魅力がまぶしかった取材活動

法学部 石川可南子(長崎県立長崎西高校出身)

大学1年の春、学生記者として

右も左も分らない頃から、取材でいろいろな人に出会う度、その人だけがもっているキラリと光る魅力に気づき、「この人みたいになりたい」と、ずっと思っていました。

大学生生活も4年が過ぎ、卒業が間

近に迫った今でも、取材の前のワクワク感と、取材後のその人の魅力への憧れは全く変わりません。取材を通して人の魅力を引き出すことのできるこの活動が、たまたまなく楽しかったからこそ続けてこられたのだと思います。

思えば私の大学生生活は、常に学生記者としての取材活動と共にありました。記者仲間の誰よりも、多くの記事を書いてきたと思います。

もちろんそれは、取材の回数を重ねたかったからではなく、取材を通して自分の知らない世界で活躍する多くの人から話を聞くことができ、自分の内面を磨くチャンスだと気づいていたからでした。取材で出会った人から刺激を受け、それがきっかけで自分の大学生

活のあり方を決めたこともしばしばでした。

インドで国際ボランティアをされた先輩からは、外国で自分のやりたいことを自由にやれるんだという勇気を教わりました。水泳や野球、自転車スポーツ選手からは、努力を重ね、1つのことを一生懸命やりきる姿勢を教わりました。

「強い力士を育てるだけではなく、礼儀のある立派な人を育てる」という信念を持った大相撲の桶山親方(元関脇・玉春日)からは、人としての基本的な力が何よりも大切なのだと教わりました。卒業後の進路で自分の目標を達成された先輩方からは、特別な活動だけではない、日々の講義の大切さを学びました。最後のインタビュー取材となった福原紀彦総長・学長からは、感情を開放し

て若者らしくチャレンジし、多くの人とつながるネットワークの大切さを教わりました。

どれもこれも、人の魅力がまぶしくて、それを追いつけた取材活動でした。取材した人も、その人から学んだことも、どれ一つとして同じものは無く、その一つ一つが今の私の大学生生活、そして私という人間の血となり肉となつていっているという実感があります。

この4年の間に、思った以上に私は、「人から学ぶ」ことで人として成長できました。そして少しは、これまで取材を通して出会った多くの素敵な方々に近づくことができただけかもしれません。この春からは学生時代の、人から学んだ多くのことを糧として、社会人としてしっかりと歩んでいきたいと思っています。

一歩踏み出して拓けた広い視野

法学部 野崎みゆき(福島県立福島高校出身)

大学2年の5月。授業の前に、

飲み物でも買おうと財布だけ持ってペデ下を歩いていた時、新歓中に配られていたチラシ入りの

「Hakumon ちゅうおう」を受け取った。サークルに入りそびれ、アルバイトもせずに、大学とアパートとスーパーを往復する日々を送っていた



た私は、『学生記者になりませんか』と書かれたチラシを見て「これだ!」と思った。

その後、いつもの尻ごみ癖で一週間ほど悩み、複数の友人に相談したりして、ようやく伊藤編集長の所へ向かったのだが、詳しく話を聞いているうちに「自分には難しいかもしれない」と感じ始めた。やっばりやめようかなと思いついた私に、伊藤編集長がこう言った。



「野崎さんは今、扉の前まで来ています。今日、話を聞きに足を運んだということは、すでに一歩踏み出しかけているということです。あとは自分で扉を開きなさい。一歩踏み出せば、新しい世界が広がっているんですから」

こうして、私は学生記者を始めることになった。初めての取材は「報道関係者との懇談会」。聞きもらすまいと前半の懇談会を緊張して終え、後半の立食パーティー形式の交流会で、中大OBで現役記者の方と話をすることができた。

その方に、「緊張して質問が出て来なくなるのは、どう克服したらいいですか」と聞くと、「例えば、好きな人の100の事を知れたとして、あなたはそれで満足する? そんなことはないでしょう。相手のことを知りたい気持ちがあれば、興味を持って、質問なんていくらかでも出てくるよ」と返ってきた。

それから取材で質問に詰

まると、「この人はどんな人なのかな」と基本に立ち返るようになった。もつとも、すぐに生かされたわけではない。最初はそれを考える余裕すらなかった。しばらく経ってふと思いつき、意識するようになったのは3年生の半ばくらいからだ。

約3年間の学生記者の活動を振り返ると、FLP、オープンキャンパスの突撃取材、白門祭、箱根駅伝、相撲部屋、硬式野球部の澤村拓一投手(現読売巨人軍)、卒業する4年生、バレーボール部のルーキー、女子水泳部員、『炎の塔』の住人等々、たくさん取材をした。取材の度に人に出会い、話を聞いて、いつもワクワクした。そのワクワクが癖になり、また取材をしたいと思う。その繰り返しだ。新年早々の「箱根駅伝1泊追っかけ取材」に2年連続参加した

ことが、まさにそうだった。

「一歩を踏み出してみる」「相手に興味を持つ」。このふたつの言葉は、日常生活でも度々思い出している。人見知りで消極的な性格は相変わらずだが、自分を奮い立たせる方法を見つけた気がする。

私の学生生活は充実していたとはとても言えない。しかし、スケジュール帳を所々埋めていた取材予定はどれもすべて大切な思い出。学生記者になって本当に良かった。

最後にこの場をかりて、取材で出会った皆さん、新しい号が出る度にお知らせのメールを送らせてもらった友人や先輩、箱根駅伝等で大変お世話になったOBの方々、大学職員の方皆さん、そして伊藤編集長に、心から感謝します。

「行動すれば何かが始まる」

法学部 橋本あずさ(私立湘南学園高校出身)

「私、新聞記者に興味があるの。『Hakumonちゅうおう』

の学生記者というのがあって、一緒に説明聞きに行かない?」この

友達の一言が私の大学生活に多くの出会いをもたらしてくれた。

編集長から活動内容の説明を聞き終えると、その場で私達は学生記者



で精一杯やって、自分がなれる最高の自分になって下さい」と語ってくれた。彼女が今まで生きてきた人生が凝縮されたようなこの言葉は、私の考え方にプラスの力を与えて

をやることを決めた。すぐに編集長は言った。「今は新歓の時期だから、学生記者募集のピラ配りをしてきて下さい」。私達は哑然とした。「大学生になってまだ一週間たらずの私達が、記者になったその日に勧誘をするのか。これが記者魂なのか」と。

この日から私が卒業までに関わった取材は約25件。そこで出会った人は数えきれないほどだ。初めての取材は神宮球場での野球の試合。中大を応援にきていた人に話を伺った。初対面の人に何を聞いたらいいのか探り探りだった。しかし、「Hakumonちゅうおう学生記者の橋本です」の

魔法の一言があればみんな心を開いてくれた。

特に印象に残っているのは初めて1人で行ったシニア学生の取材である。50代の女性のそのシニア学生は、大学に通いたいと思いついて、社会人入試を受け、中央大学に入学した。第一印象はおとなしそうな人だったが、話してみるととても真つ直ぐで、強い女性だった。

取材の最後に団塊の世代の方々に向けてのメッセージをお願いすると、彼女は「行動すれば何かが始まります。行動してから軌道修正しても遅くないと思います。自分の能力の中

くれた。

毎回取材前に、私は少し憂鬱な気分になる。「初対面の人と何を話そうか。自分はどんな印象をもたれるのだろうか」と。そんな時にシニア学生の言葉を思い出すのだ。そして「なに、ウジウジしているんだ。自分から行動しなきゃ」と思う。何をすることも少し慎重な私はこの言葉に出会って潔くなった。

「出会いは縁です」と編集長がよく言っていた。取材で出会った人がまた新たな人を紹介してくれたり、私の知らない事をたくさん教えてくれる。そして経験させてくれる。しかし「出会いはシンプルだが難しい。「自分の足で会いに行き、自分で考え、自分の言葉で話す」からこそ相手が心を開いてくれて、縁としてつながる事ができるのだと感じた。たくさんのお会いで彩られた私の

「どう生きるか」を探し続ける

文学部 望月繁樹(高校卒業認定試験)

2 月初旬、早朝。この最後の記事を書いている。4年間を振り返り、集大成として「今の僕」を

大学生生活4年間は、あつという間に過ぎて行った。法律、行政、ジャーナリズム、国際、様々な分野を学んだ。FLP、学部ゼミもそこそこ頑張った。ダイビングスクールでは目標だったダイビング100本を達成した。アパレルのアルバイトでは上のランクに上がった。学生記者の講演会では初めて司会をやった。海外旅行は7カ国行った。大学ではたくさんの友達ができた。親友もできた。たくさん笑って、たくさん泣いた。言葉では表わしきれないほどに毎日が充実していた。

そんな私も4月から社会人として働く。二度とこない学生生活に「さようなら」をするのはとても悲しいが、今まで育ててくれた両親、そして今まで出会ってきた全ての人達に感謝し、ひるむことなく進んでいきたい。行動あるのみ！

書き残しておきたいという思いとは裏腹に、まったくもって原稿を書く手が進まない。ここ数日書いては消



し、書いては消しの繰り返しだ。
うまく言葉が出てこないで、過去の本誌を引つ張り出し、先輩方の「最後の私ニュース」を読み返してみ。そこには充実した大学生活を送ったことが各々の言葉で綴られており、素直に感動と尊敬の念が沸いてくる。さて、僕は…。

先輩方の「最後の私ニュース」と比べると、こんな後ろ向きなことを書くのも気が引けるが、僕の大学4年間は「充実していた!」とか「成長した!」と胸を張れるかというところ、どうも疑わしい。細かに思い返せば、良い思い出も学んだ事もたくさん

あったはずだ。だが、何か胸に引っかかるこの物足りなさは何なのだろう。

それはきつと僕の中である種の「迷い」が消えないからだろう。その「迷い」とは「自分自身」や「社会」に向けられたものだ。自分とは? 社会とは? これからどう生きていくのか? 大学で哲学専攻を選んだのもそんな思いがあったからだ。4年間、心のどこかでその答えをずっと探し続けてきたような気がする。

学生記者の活動に飛び込んだのも、様々な人と出会うことでこの「迷い」の答えが得られるかもしれない

と期待したくらいだった。取材で出会った人達は皆生き生きしていた。目標を持ち何かに熱心に打ち込む姿はエネルギーに溢れ輝いているようだった。僕もそうなりたい、取材の

度に思った。

そうした経験を繰り返し、一つわかったことは「答えは一つじゃない」ということだ。生きていく上で、当然ながら皆それぞれ異なる価値観・考え方をもっている。その当然すぎる事実をこれまで「実感」として、うまく理解できていなかったように思う。しかし、大学生活を通じておぼろげながらそのことに気付き始めたような気がするのだ。ところが、ここでまたしても新たな問いが生じる。「答えは一つじゃない」、「じゃあ、お前は どうするんだ」と。

だから僕は留年をすることにした。いや留年して卒業を「先延ばし」にしたからといって答えは得られないのだろう。それにきつと他の多くの人それぞれ迷いは抱えつつも前に進んでいくのだ。それでもなお、僕には社会に出る前にもう少し時間が必要だと考えた。自分でも歯がゆいがマイペースにやるしかない自分自身に言い聞かす。

ここで学生記者としての活動は一旦卒業することになるが大学にはもう一年在籍する。この貴重な時間を使いもう少し「迷う」ことにしよう。

この先も「迷い」の壁に度々ぶつかって、その度自問自答することになるだろう。そんな時、今すぐには「成長」を実感できなくても、大学での経験がどこかで生きてくることを信じている。

最後にこの場を借り、学生記者の活動を通じてお世話になった全ての皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

